

説明できるであろう。「戦時中」、「交戦中」の作戦権、自己防衛権などは非戦中、休戦中、平和などとは対立する軍事的な概念である。最前線では警察はもちろん憲兵さえも治安に力が及ばない。軍人たちがもつとも自由な状況になる。「人間の条件」からも解放されて動物的になる状況かもしれない。それは狂気でもなく、正気でもない境界状況かも知れない。そのような状況の中では突発的にしろ組織的にしろ殺人、強姦などが起こりやすく、戦争には性暴行が「付きもの」だと一般的にいわれるのである。

上述したように、戦争中といってもすべての軍隊が性暴行を犯すわけではない。私は朝鮮戦争の時、中国の軍隊が性暴行を全くしなかったことを体験的に知っている。それは軍の性を管理する政策と関わるものなのかもしれない。「中共軍」は朝鮮戦争の時に韓国人の女性に、終戦の時に日本人の女性に対しても強姦などの性暴行はなかったという。再度言うがこれは戦争が必ずしも狂気にはならないということの可能性を示すものである。

第三章 売春の広がり



韓国における一般的な売春

本稿では、売春が反社会的であり、非倫理的であるにもかかわらず、どうして社会がその存在を許すのかという問題点を設定し、韓国における朝鮮戦争時の性暴行と売春、最近の喫茶店での売春について、私の体験した事実も踏まえながら、考察してみる。そして売春が発生する過程とその機能や意味の解釈に接近してみたい。

私の故郷は両班同族村ではないが韓国の普通の農村であり、儒教の通過儀礼や祖先祭祀を大切に守っている村である。従って性に関しても儒教的な倫理が強いのは言うまでもない。特に女性には貞操を守ることや淑女としてのモラルが厳しかった。しかし戦争は儒教社会の性的倫理もすっかり変えたのである。朝鮮戦争により私の故郷の村が性暴行と対置して売春村となった経緯については上述した通りである。その売春は性暴行を含みながらも基地村に定着している。しかしその売春は基地村に限ったものではない。ここではより一般的に売春が行われる現実に向ってみる。

売春が反社会的な性の逸脱行為として規制する性倫理社会があり、一方合法的な婚姻の枠内で社会全体の性的欲求を満足させることは出来ないと考えて、売春の制度化によって正常な生理的緊張をゆるめる社会もある。つまり程度の差はあれ、どのような社会にも売春とその規制が存在している。しかし現代社会では結婚や売春の固定観念も激しく変化し、売春の有様も変化している。従って売春を定義することとは難しいが、あえて定義するならば、売春とは性の正常と性の逸脱のダイナミックスな関係、均衡と不均衡などの関係であるといえる。結婚にも一種の「得意売春」のようなものもあれば、売春といっても愛人関係のようなものも多い。

芸者、側妻、妻、浮気、姦通といったことばの存在や意味もそれぞれ現代社会において変わり、結婚と売春の区別が難しいというのは単純な皮肉ではない。伝統的に東アジアでは妓生制度があり、現代社会でも表面的に取り締まってはいるものの、非公式には性産業は繁盛している。

私の故郷の村に駐屯した米軍部隊は村を離れて、四キロほど離れた東豆川市にまるとまって長期的に駐屯している。その村にいた大部分の売春婦はそちらへついて

いった。洋セクシーや洋カルボと呼ばれる売春婦が一個師団の兵士の二―三倍はいると言われている。米軍部隊が駐屯しているところでの景気は米軍の外出によって影響され、もし米軍が外出禁止になるとすぐ不景気になるという。これは米軍キャンプがあるところであれば同様で、全国的に有名なのはソウルの梨泰院、京畿道の波州と鳥山、大邱などである。これらの町並みはアメリカの風景のようであり、治外法地域として知られている。

私は大邱市のキャンプヘンリーやキャンプワーカーの米軍部隊の前で国際結婚を扱っている店の看板を見たことがある。最近韓国のハイクラスの人は、アメリカ文化に触れるために米軍部隊内のゴルフ場やレストランに通うのを好む人が多い。朝鮮戦争後白人と歩く女性は売春婦だと思われたが、最近は国際結婚が多くなっており、売春婦が米軍人と国際結婚をした例も多いようである。それを研究したところによると、米軍人は恋愛の相手を変えながら結婚相手を探す、韓国の女性は一人の相手に執着して離れない。この結婚観の違いが韓国女性にとって国際結婚の落とし穴となるようである。韓国社会では女性は貞操をなくしたら結婚マーケットで

は救われないという考えがあるため、売春婦たちは米軍人、あるいは西洋人は自分たちにとって理想的な結婚の相手であると考ええる。

日本で水商売をする韓国人女性においても似た傾向がある。呉善花の『スカートの風』によると、貞操をなくして結婚マーケットでは救われない韓国の女性が日本に流れて接待婦になっていくことがわかる。売春婦たちは韓国軍隊の周辺にもいる。主に軍人たちが利用する汽車の駅の周辺を中心に、淪落街が形成された。つい最近までソウル駅と清涼里駅の周辺には売春婦が密集した。このような事情はよく見られる現象でもあった。

売春婦たちはたいてい民家を借りて、家庭の雰囲気を保つような飾りつけをして米軍人を得意客にしている。ホームシック状態にある米軍人にとっては家庭的雰囲気を味わうことができ、慰めになる慰安所のようなものだろう。多くの売春婦たちは、運が良かったらアメリカへ行けるかも知れないという国際結婚の夢を持っている。性的に墮落し、社会から捨てられたと思われる売春婦にとって、国際結婚が可能な脱出口でもあった。売春婦たちにとっては得意客を作って国際結婚を狙うか、

金を稼いで商売をする資本金を作るのが主な目的である。

C女は売春婦になって白人の子供を生んで育てていたが、他の米軍人と付き合っ
て結婚するつもりで生活費も送ってもらっていた。しかし途中、連絡が途切れてし
まい国際結婚を放棄し、貯めた金で喫茶店を経営したが、最近交通事故で死亡した。
売春、淪落行為は結婚という正道から逸脱した行為であるが、売春婦の側から見
れば売春行為は結婚への道であるとも考えられ、実際その機能を果たしているア
イロニカルな現象もある。韓国の喫茶店である「茶房」を利用した売春にも同様の
現象がある。一般人から見ると売春婦は自分たちを性暴行から守ってくれる人であ
るが、売春婦自らは最低のベースを利用して正常に戻ろうとしているのである。政
府や行政者が売春を取り締まろうとしているが、民衆の売春に対する見方はまた異
なっている。

次に「茶房」の売春について考えてみる。

茶房

私は茶房（喫茶店）に頻繁に通ったことがあっても、そこに売春行為があること
は知らなかった。農村や漁村の現地調査において、茶房は必ず立ち寄るところであ
り、茶房というものの特徴や機能に関心を持つようになって、初めて売春に気が付
いたのである。

韓国において本格的な茶房の営業がはじまったのは、日本植民地時代であった。
韓末の開化期において、西洋の外交員によって持ち込まれたコーヒー（珈琲茶、加
比茶、洋湯）と紅茶は上流社会に広がった。仁川のホテルの付属茶房で売られたの
が最初のものであり、ソウルでは一九〇二年にドイツ系ロシア人によるホテル式の
茶房が最初であった。一九一九年、三一独立運動後に近代的な茶房が現れ、その後
日本人による青木堂、朝鮮ホテルの茶房などが現れ、一九二三年頃には日本人によっ
て金剛山において近代的な喫茶店が開かれた。その後は韓国人の芸能人による文化

空間としての茶房が現れた。第二次世界大戦前は文化空間として展示会、出版記念会などが茶房で催され、また失業者が集まる場にもなっていた。

朝鮮戦争後、戦前の文化空間としての茶房の性格は変わった。一九六〇年代以後は以前の知識人による経営の方式が、女性のマダムやアガシ（ウェートレス）、そして厨房長による経営システムの登場により大型化したのである。そして茶房は急増してきた。

ソウルで一九四四年には六十か所であった茶房が一九五五年には二八六か所、一九六〇年一〇四か所、一九七七年三三五九か所になっている。一人の経営者、アガシが二人、原付オートバイで配達する男性一人、コックの男性一人というメンバーで営業している。

経営者はアガシを採用する際には給料の一割にあたる紹介料を職業紹介所に支払い、アガシには一か月分の給料を先払いして連れてくる。この茶房のアガシの給料は住み込みで月百二十万ウォンであるから、十二万ウォンの紹介料を支払ったという。給料だけでも大学教授の初任給よりやや高いので、住食を含めるとかなり高い。

方であると言ったのは、同行したある韓国人の教授であった。

経営者にはマダムやアガシを連れて来るいわば人事権があるが、アガシを管理するのはマダムである。マダムはアガシたちの姉のように化粧方法、勤務時間、接待のしかたなどの指導をする。マダムは精神的にも頼りになるが、時には人間関係が悪くなり退職することもあるという。しかしマダムの主要な役割は客の管理である。

茶房にはチマチョゴリ姿のマダムがいて、得意関係にある客の接待や話し相手をつとめたりする。評判の良いマダムには多くの客がつく。また注文に応じてマダムやアガシたちが派遣され、付け払いにも応じる。このマダムシステムは全国的に急速に普及したが、現在都市においては日本式の喫茶店に近いコーヒーストップが流行する傾向にあり、ウェイトラーの登場とともにマダムが消えつつある。しかし、まだ田舎には残っているのが現状である。

とはいえ、都会、田舎を問わず茶房が社交の場、憩いの場として重要であり、成人男性のなじみ客となれば一日数回足を運ぶこともまれではない。そして得意関係になると茶房を便利に利用できる。自分の行きつけの茶房を定めている者も少なく



コーヒーを出前するアガシ (本文とは関係ありません)

庭に一人で多人数分のコーヒーを注文する人がいるが、その時は気をつけるという。私はその中でそのような人のためにチケットというシステムがあるということを知り得た。このシステムは秘密であり、かなり得意客にならないと知らされないという。

アガシたちに話を聞く

私は調査のためにアガシと長く話をしようとしたところ、マダムにボンという隠語で通じる「チケット」というシステムがあり、それを利用しなさいと言われて初めてその存在を知ることが出来た。

「チケット」とは、時間当たりでアガシを専有する

ない。地方の都市では、茶房ごとに出入りする客の顔触れもだいたい決まっている。茶房の経営の難しい点は、他店との競争にある。隣の茶房に客を奪われないように客に対してサービスをすること、そして得意客を多く確保すること、さらに難しいことは得意客がつけ払いではなくその場で会計を済ます現金商売にしないと商売にはならないという。何より商売を繁栄させるためには、コーヒーの出前の範囲を拡大していかなければならない。原付バイクを運転する男は、アガシを乗せて走り回り出前を効果的にする。場合によっては、アガシ自身がオートバイに乗って出前に走るといふ風景も都市では珍しくない。原付の登場はコーヒーの出前の拡大を意味する。

R茶房は一日百三十か所に出前すると言う。男が運転する原付の後にアガシがコーヒーポットとカップを持って同乗して配達する。なるべく多く回るために何力所か近いところへまとめて配達し、コーヒーを客に出しておいて客が飲む間に他のところへ配達し、逆順にカップを回収して帰る。

配達の注文は官庁の事務室、旅館、食堂、個人の家庭まで多様である。旅館や家

システムのことである。客は気に入ったアガシやマダムを専有したいときに茶房に電話をしてチケットを注文し、マダムは時間などを考慮して可否を検討、OKの場合には時間当たりの値段を伝える。値段は茶房ごとに多少の差はあるが、だいたい一時間当たり二万ウォン前後である。名目としては、気に入ったマダムやアガシと一緒に飲みながら食事をしたという人に対して、注文で応じると説明されたが、これが売春に結びついていいることが社会的に非難の対象になっている。

このことを主題にした映画『チケット』（林権澤監督）が人気をよんで、一般に知られるようになった。反体制文人の妻であったジスク（キム・チミ）はもう墮落して江原道の港町でアガシを連れて喫茶店を経営している。初めてアガシ生活をすするセヨン（チョン・セヨン）はお客さんの要求を断ってジスクに叱られる。大学生の恋人であるミンスが訪ねてきて学費がなく学校を止めるしかないと聞かされて、セヨンはお金を用意すると言って色々なことを探している中で、パク船長と親密になる。パク船長との関係を知ることになったミンスがセヨンに絶交を宣言するが、ジスクはミンスに会って説得する。しかしミンスに断られる。

コーヒー配達に出て行って売春して来る女たちがお金にこだわる理由の一つ、家族を養わなければならないからである。

私が全羅南道の島々を歩いたとき、多くの茶房の人口には、わが茶房ではチケットをお断りしていますと書いた貼り紙が貼ってあった。そこで数か所を調べることにした。

T茶房は面事務所の所在地の九か所の茶房の中では比較的従業員の待遇が良いといわれている。マダムの給料は百五十万ウォン、アガシは百四十万ウォンであり、原付の配達員は置かないためアガシが遠くまで出前に行くことはなく、近いところを歩いて出前する。

この茶房にも、わが茶房ではチケットをお断り、と貼り紙はあったが、一時間当たりボン（チケット）料一万ウォンによる売り上げが二十〜三十%あるという。そして一日の売り上げはおよそ二十五万ウォンであるという。売り上げの割合はホールが三十〜四十%、出前が五十%、チケットが二十%という。チケットの費用は全部マダムに支払われ、アガシは月給として貰う。しかしアガシはチケットを利

用して金を儲けることが出来る。それは茶房とは関係なく全く個人の能力によるものであるからである。つまりお客から直接「風呂代」（売春代）として貰うチップが大きな金額になるという。出前については一定の得意関係を持っていない。どこからでも注文があれば応じるという。

G女（二十九才）はアガシになって二年で、光州の職業紹介所を通して百四十万ウォンを先払いとして貰ってこの茶房に来了。

茶房の経営者は紹介料として二十万ウォンをプラスした合計百六十万ウォンを紹介所に支払い、さらに彼女が前借りを要求したので五百万ウォンを貸し金とした。これはアガシが少ないので彼女の要求に応じたものであり、長く働いてもらうための保証金でもある。

しかし一つの職場では通常、いろいろな事情から長く続かないのが常である。例えば、三か月で辞めるときはその借金分を新しく雇い入れる方で負担するようになっていく。ソウル市では朝九時出勤、夜二十二時退勤、そして非番として休日と

いうシステムであるから、アガシの給料は八十五万ウォン程度にしかない。そこで田舎であつても給料が高いところに勤めることになるがその分大変なこともあるという。例えば、六か月ごとに性病検査などの健康診断を受けなければ保健証明書を貰えず、それがないと営業が出来ない。

チケットというシステムは通常朝八時から夜二十一時までになっていて、その時間内において金を儲けることが出来る。しかしそれ以外の時間、特に夜二十三時から一時において食堂や飲み屋で酔っ払った人の相手をする事が多く、それは嫌だという。

食堂では人件費が高いいのでアガシを置かないで茶房のアガシを利用して商売をするのが一般的である。注文があるとアガシは自分の意志とは関係なくシステムとして行かざるをえない。チケット注文の基本数は応対できる数の三倍以上である。客の中にはいやらしいことをしたり無理なことを要求したりする人もいるが、その時は応じて風呂代を貰うか、拒絶する。また売春をしても金をくれない人もいて、困っても売春が法律上違反であるので告発することも出来ず、泣き寝入りするしかない

という。しかし、客がコーヒー代をつけ払いにして逃げ、結局払わないときは、告発できるので問題はない。

K女(三十一才)は本名の姓はKであるので最初はKを使ったが、霊光郡ではHを、ここT茶房ではMを使用する。この世界では本姓を使う人はほほいなが、だいたい名前はそのまま使う。一回使い始めたものはずっと使うが、茶房に同じ姓の人がいる時と失恋した時は替える。前者においては新しく来た人が他姓に替えて使うという。しかし姓名全部、つまり姓+名前を全部別名に替えて使う人はほとんどいないという。

K女は全羅南道のある島で十か月勤めた後、長興、霊岩、求礼、珍島などを経て冠山に來ている。やはり光州の職業紹介所を通して移動するのだという。光州には職業紹介所が多い(七か所)が、K女は一定の所を利用する。昔は茶房から茶房へ移るのは化粧品売りのおばさんに頼ったが、今はほとんどといってもいいくらい職業紹介所を利用する。

初めてアガシとして茶房に来る人は、だいたい飲み屋からである。田舎の家出娘や墮落した女性が飲み屋に勤め、多少とも世間体の良い仕事を見つけるために茶房に移るといふ。なぜなら飲み屋に比べると茶房は昼の仕事であり、客からも正常な付き合いを求められ結婚できる可能性もあるからである。つまり茶房は良い縁組みの場でもあるという。それぞれの茶房にはその茶房で結婚相手を見つけて成功した例が神話のように伝わっている。先日この茶房のアガシが、金持ちのやさしい人と結婚した。彼は奥さんが浮気をして家を出たので、家事子守をよくする人を茶房で見つけて結婚して幸福に暮らしているという。

結婚を狙う

結婚を望むアガシは多い。しかし良い相手は少ない。良い相手というのは金持ち

で、しかもやさしい人である。農村には行きたくない。商人がいい。時には人身売買に遭う危険性もあるが、結婚は彼女たちの夢である。実際結婚生活を幸せに過ごす人も多い。しかし概してアガシの結婚は難しい。良い相手が見つかったとしてもまわりが反対したり、うるさく口をさしはさんだりして、うまくいく率は非常に低い。何故なら一般的に、茶房のアガシがコーヒーポットを持って歩くのを蔑視する傾向があるからである。

ある人は、夫の暴力のために離婚して茶房に入り、養育費を月三十万ウォンずつ払って子供を人に預けて育てている。

長年の経験を積み能力がある人はマダムになれるが、マダムは責任のある難しい仕事であるので、三十才を過ぎてもそのままアガシをしている人も多い。K女もマダムになってもいいのにアガシとして働いているという。彼女は結婚はしたくないという。なぜなら男は皆浮気者、二重人格者であるからだという。男はいくらおとなしそうに見えてもいつかは動物的になるともいう。

この茶房に来る客の七十%程度は老人の男性であり、アガシに触りたがる人が多い。

いという。客の話はどこから来たか、何かなどといった決まり文句が多いのでつまらないという。若い客はそんな人が少ないし正直であるから良い客だという。女性には男性と一緒に来たり、女性同士で来たりすることはあるが、一人で来る人はいない。

一番良い客は、人を多く連れて来て静かに話をして短時間で帰る人であり、その逆は困るという。例えば一人で来て長く座ってアガシ相手に煩わしいことをする人である。アガシに対して乱暴な言葉を使う人もいるが、人の好きな人は口が悪くても悪い感じはしない。言葉はおとなしくても卑怯な人は嫌いだという。小さい町では男性たちが経営者との人間関係から人との約束場所として利用したり、多くの人を連れて来たりすることもあるが、複数の茶房に顔を出して利用する人もいるという。アガシは売り上げが良くなるように頑張る。給料は決まっているが、売り上げが良いと働き甲斐があるからである。しかし難しいことが多い仕事であるという。

K女には辛い経験が多い。ここは港が近く乱暴な人が多く、特に口と手が荒く、茶房でアガシの体に触りたがる人も多い。チケットの時には何をしてもよいように

思う客もいて、性交を強要したりする。ある日、二十七才の男が一人でチケットを買ったので相手の反応を注意して見ていたら、西瓜に焼酎を入れ飲ませて暴行しようとした。断って茶房に帰ったら、その男が怒って茶房に電話をしてマダムに従業員がよくないと文句を言ってきた。そういう時マダムはアガシをかばうのが職業上のしきたりだという。またマダムの実力を試される時なので（そういう時のマダムの相手を攻撃するための悪口は経歴を意味する）凄いい悪口でやり返して、その場を治めるのである。

お客さまが神様なのではなく、アガシが女王様のようなと言われることもあるが、たまに仕事がなく家に帰った時は（親には勿論工場の休暇だと嘘をつく）、緊張が解けて二十四時間ぐっすり眠ったり、茶房で出会った人と個人的に会ったり、親睦契（たのもし講）という集まりに参加したりするという。

A女（三十才）は本姓は言わない。マダムとして警戒心の強い女性である。給料は百五十万ウォンくらいかという質問に対して、「珍島で三年間やってここに来た。

ここの茶房はおとなしい客ばかり来るのでこの茶房を選んだ」と答えた。茶房についての質問や撮影についてはかたく断りながらも、情報を提供してくれた。

チケットは二時間単位で二万ウォンであり、ボンという隠語の意味も教えてくれた。アガシが「ボン」というドリンク剤（二千ウォンのもの五個）を持って行つて一時間を過ごしたことからという語源説である。

マダムはアガシの時間の管理はするが人事権はないとか、この茶房は四人のアガシが働いているので人件費がかさんで経営が大変だという経営者の立場からの話もしてくれた。またアガシは時々前金だけを持って逃げたりして困るという。アガシの管理を意識した発言は、アガシの意見とはやや違った印象を受けた。

次に茶房からコーヒーの出前をするという特徴についてであるが、これも上述の説明の延長線上で考えることが可能である。これはコーヒーの出前というよりは女性の派遣の意味合いが強いからである。韓国では料理屋の出前はあまり行わない。農民がご飯を仕事場まで持って行って食べることはあっても、食堂の出前はない。中華料理屋が新しく配達を行っているが、他の食堂や飲み屋の配達は全くない。

言っている。このような状況でコーヒーが出前になったのは例外である。

このコーヒーの出前は中世の中東で盛んであったことと似ている。ハトックス著『コーヒーとコーヒーハウス』には次のように書いてある。

中世の中東のコーヒーショップは本質的に「出前」の店だったから、市場で商売する人の便宜を考えて、たいていは商業地区にあった。店は、ほんの小部屋ぐらいのものしかなかった。そこでコーヒーを入れると使用人に手渡され、彼は市場に並ぶさまざまな店にコーヒーを運んでいった。こうして商人たちは客をもてなし、一服したのである。中東のどんな場所でも、市場や事務所にしたことのある人はよく知っているが、その習慣は今でも生きている。若い男や少年たち、コーヒー店の使用人や使い走り、カップと一人用サイズのポットをのせた盆を持って、通りや裏道を走り抜けていくのを目にすることは珍しいことではない。

(ラルフ・S・ハトックス著 斉藤富美子、田村愛理訳『コーヒーとコーヒーハウス』同文社 一九九三)

第四章 韓国における性倫理・貞操観念

